

小田原市文化振興ビジョン策定検討委員会 第2回会議概要

1 日 時：平成23年9月23日（祝） 10：00～12：00

2 場 所：小田原市役所 大会議室（7階）

3 出席者

(1) 委員（11名）

石塚委員長、間瀬副委員長、鬼木委員、桧森委員、杉崎委員、露木委員、
平井委員、岩城委員、大森委員、神馬委員、山口委員

(2) 行政（7名）

諸星文化部長、奥津文化部副部長、座間文化政策課長、古矢文化芸術担当課長、
杉本文化政策係長、福井主査、本多主事

4 傍聴者：4名

5 概 要（議事）

【石塚委員長】

- ・本日は、最初に小田原の課題を整理したうえで方向性を定め、そこから導き出される具体的な取組について検討していきたい。
- ・本日の議題について各委員が事前に提出した意見を取りまとめた資料が、事務局より配付されている。資料に不足している部分や重点的に取り上げるべき点について発言いただきたい。

(1) 小田原の課題について

（委員意見の取りまとめ結果について古矢文化芸術担当課長より概要説明）

【石塚委員長】

- ・今後の段取りとしては、本日の議論を基に、次回会議で事務局からビジョンのたたき台を提示していただこうと考えているので、意見や追加すべき点があれば遠慮なく発言いただきたい。

【桧森委員】

- ・少子高齢化の進行を止めることができない中、まちの活力を生み出していく担い手として、女性が様々な場面で意思決定に参画していく必要がある。また、若者や能力のある外国人にも活動の場を与え、活躍してもらいたい。女性・若者・外国人の活動に対しては制約があるため、その要因をどう取り払っていくかを考えることが、

文化の面においては特に大切。文化をつくることと新しく創造していくことは近い意味を持っており、このような人達が創造の担い手となることに期待する。

- ・アマチュアとプロフェッショナルのどちらに重点を置くかが不明確。市民が趣味として行っている様々な活動を活性化することも、プロの方々が小田原を拠点に世界に向けた活動をしていくことも、いずれも必要と考えるが、文化に関する議論の場では、とにかくプロの存在を忘れがちになる。芸術文化や創造・創作活動を仕事としている人をどう位置付けるか。「創造都市」とは基本的にプロが活躍している場所をいい、その視点をビジョンにどう取り込んでいくかが今後の課題である。
- ・情報発信についてビジョンに盛り込んでいく必要があるのではないかと。専門性を持って様々な文化情報を編集し、日本や世界に発信していく主体が必要。これからのメディアを考えると、紙媒体以外のもが良い。愛知県では、雇用対策事業の一環として、離島の情報発信を行う「日本一楽しい仕事」の従事者を募集した。月 30 万円の給料で 3 か月間離島に居住し、島の魅力をブログとツイッターで発信するというものであるが、仕事自体が話題性を持ち、採用された 3 人の女性がテレビで取り上げられる等の広がりを見せている。そのような仕掛けが小田原にも必要ではないか。

【鬼木委員】

- ・文化振興の意義に関して補足。なぜ文化振興に取り組むのかを改めて確認すると、小田原市の文化振興はまちづくりと連動するもので、市民生活の基盤となり、新たな価値を創造するものである。市民のアイデンティティを形成するとともに、都市ブランドやシティセールスといわれるように外に向けての発信の意味もある。また、文化がまちのエネルギーとなることや、人づくりの視点も含め、そういうものがあるからこそ、まちとして文化振興に取り組む意義があるということをビジョンの冒頭に入れる必要がある。
- ・桧森委員のおっしゃるプロの支援には同感。プロの活動は経済と直接結びつくものであり、そのような関係性が文化振興の意義に盛り込まれても良いのでは。

【露木委員】

- ・プロダクトデザイナーの喜多俊之先生の紹介で、フランスの見本市「メゾン・エ・オブジェ」に出展した。情報発信の場として若手クリエイターが招待されるもので、今回は震災復興支援として日本人 6 人が参加した。とても良い経験をさせていただき勉強になったが、プロを育てることがまちづくりになるという桧森委員の話は、なるほどと思った。
- ・小田原には京都に匹敵する潜在能力があると思うが、廃れて無くなりかけているというのが現状。まだ可能性はあるが、情報が発信されず、認識されていないことが原因だと思う。作り手側の意見ではあるが、情報発信は大切である。

【神馬委員】

- ・情報発信には拠点が必要と考えるが、市民会館にはその機能がなく、情報が散漫になってしまっている。官民どちらが主導となるべきかは判断しかねるが、強力な基盤となるものは必要。

【大森委員】

- ・運営組織について補足。芸術文化が盛んなところは自主事業が非常に多いが、今の市民会館の自主事業は、目を覆いたくなるような数である。企画運営組織が存在していないことが原因であり、それゆえに文化予算も非常に低い。
- ・これまで議論されてきたプロの養成、情報発信、女性・若者がメインとなる活動の創出のためにも、財団法人や NPO 法人といった組織づくりが重要となってくる。

【平井委員】

- ・ビジョンの構成において、課題・方向性・取組に一貫性を持たせるべき。最初の課題が抽象論になってしまうと、その後はどうつながるのかが分からなくなってしまふ。具体的な課題を提示し、その解決策として明確な方向性と取組を導き出せるよう、たたき台作成の際に注意していただきたい。

【桧森委員】

- ・課題は、描いた夢を実現していく過程で消えたり解決したりすることがある。ビジョンとは夢を描き、それをどう実現するかを考えることではないか。課題を意識しながら夢を描くことは大切だが、ビジョンとしてまとめる際には、やはり夢が前提となる。

【石塚委員長】

- ・小田原市の将来構想の中で、ビジョンがどこに位置付けられるのかを整理しておく必要がある。この委員会でそれらの構造に対する意見が出てくるようであれば、問題提起として声をあげていけば良いのではないかな。

(2) ビジョンの方向性について

(委員意見の取りまとめ結果について古矢文化芸術担当課長より概要説明)

【間瀬副委員長】

- ・ビジョンの組み立て方には2通りある。実際に行われているものを小項目として挙げ、それを区分けして中項目にしたうえで全体を俯瞰して大項目とする方法と、先に大項目を挙げて具体的に細かいものを出していく方法。
- ・逗子市では、文化振興条例を基に、平成23年4月から具体的な文化振興基本計画をスタートさせた。この計画では、市民と行政による推進組織とともに評価組織を作り、PDCA サイクルによるチェックをしながら事業を進めていくこととした。
- ・20年後、30年後の、市民が心豊かに楽しく生活できるまちという夢を小項目の中

から絞り出し、これらを紡いで一つの方向性を作るということだと思う。

- ・文化活動を行うのは個人なのか組織なのかという選択肢があるが、文化振興において重要なのは、それらをどう連携させていくのかということである。
- ・課題・方向性・具体的な取組を個別に深く議論するのではなく、時には行ったり来たりしながら、それぞれについて繰り返し検討していきたい。大切なのは夢を紡ぐこと。

(3) 具体的な取り組みについて

(委員意見の取りまとめ結果について古矢文化芸術担当課長より概要説明)

【石塚委員長】

- ・この議題については、一人ずつ意見を伺いたい。

【岩城委員】

- ・常に念頭に置いているのは、小田原で生まれ育った人の心に一生残る原風景となるか、また、転入してきた人が終の棲家として小田原を選択するかということ。
- ・文化は子どもの頃の体験を基に育っていくものだと思う。親や学校がどう子どもに関わってきたか、親子で文化芸術に触れる機会がどれだけあったか、青春時代に何を思い、自分を見つめたかが重要であり、そのためには、ミュージアム等の環境を整える必要がある。
- ・一般的に、小田原の人はのんびりしている、優しい、危機感がないといわれる。実際のところは分からないが、そのような市民性を活かすのか変えるのかが悩みどころである。
- ・情報発信に関しては、広報やタウン紙などにより情報提供は豊富にあるが、市民がそれらをキャッチできていないことが問題。10軒の家があれば2人くらいが誘い合って参加できるような地域を構築することができれば、生活の原点から小田原を変えていくことができると思う。

【石塚委員長】

- ・小田原の市民性を変えるか否かという重要な問題提起があったが、これに対してはどう考えるか。

【桧森委員】

- ・市民性は変えなくて良い。生活の質を高めるのが文化の大きな役割。のんびりしているというのは生活の質が高いということで、それを文化によってさらに高めていくこととなる。

【露木委員】

- ・心を豊かにすることは大切。
- ・昨年、箱根ラリック美術館で企画展を開催させていただいた。ルネ・ラリックはフ

ランスのジュエリー・ガラス工芸作家。ラリックの作品と寄木細工の様子が似ていることがきっかけであったが、来館したラリックファンが寄木細工に感銘を受け、孫の誕生記念として寄木の盆を購入したというエピソードを聞き、とても嬉しかった。そのような喜びからも文化は育まれるものである。

- ・どこにでもあるもの、どこでも見られるものでは、新鮮さや感動は生まれない。特色がなくてはならない。

【大森委員】

- ・文化観光という言葉があり、これが非常に重要と考える。
- ・小田原で経済再生の起爆剤として、文化観光の舞台となり得るのは駅前と三の丸地区であり、市民にとっても観光客にとっても魅力的な居心地の良い場所へと整備していく必要がある。小田原城と一体となった歴史的景観と魅力的な街並みを再現することにより、今まで点でしかなかったものを「面」として街全体の魅力を発信できることになり、小田原が変わったという大きなアピールになる。
- ・各方面での魅力アップも大事だが、ここが変わったと分かるような、象徴的な一か所を見せる必要がある。三の丸地区は箱根駅伝の中継で毎年全国放映される場所であり、魅力的な場所となれば、小田原をアピールする CM を無料で流せるようなものとなる。

【鬼木委員】

- ・文化観光について、横浜の事例を紹介したい。
- ・私自身の横浜市での所属名が文化観光局であり、文化と観光を結びつけて横浜の活性化につなげることを目的としている。文化振興、MICE（国際会議の誘致）、創造都市推進の3つを平行して進め、連携により効果を発揮するために創設された。
- ・現在、「横浜トリエンナーレ」という国際展を開催しており、国内外から10万人を超える来場があるが、これと連動して、トリエンナーレの来場者に横浜市内の他の場所も見てもらおうという趣旨で「OPEN YOKOHAMA」という企画を行い、観光・宿泊・その他の消費に結びつけている。
- ・観光というと大規模なイベントのイメージがあるが、個々の取組には、10人程度で参加するツアーのような小さなものもある。このような小さな取組をつなげて、市全体への波及効果を狙っている。
- ・文化観光局の位置付けとして注意すべきは、文化と観光を同化するのではなく、平行して進めていくということ。文化振興施策としては、例えば地域文化振興拠点としての区民文化センターの整備、学校へのアーティスト派遣、国際音楽セミナーによる人材育成といった個別の取組がある。
- ・人づくりとまちづくりを連動させて総合的な政策を進めている。文化と観光を関連付けて厚みを持たせ、総合的に取り組むというイメージができるとう良い。

【神馬委員】

- ・市民の文化的な満足度の向上も、観光地としての魅力アップも大事。地元の人が魅力を感じ、誇りや愛着を持てるまちになれば、外からも人が来るようになる。まずは市民の満足度を高めていく機会が必要。
- ・箱根に近いことや自然を活かした誘致等、全国から小田原に関心を持ってもらえる企画ができると良い。

【杉崎委員】

- ・市内でイベントを実施していると、商店が文化に無関心と感じる。文化のあるまちづくりを目指して商店にも協力を求めているが、問題となるのは、イベントをやっ
て何になるのかという疑問。イベントで人を集めても、大型チェーン店に持って
いかれてしまって商店には何も残らないという状況を変えないといけない。新市民
ホールができた際に、高円寺のようにホールと商店街が連携していくためにも、小
田原への出店者に対して、文化振興に協力する条例等ができないだろうか。
- ・京都では交差点そのものがランドマークとなっている。小田原でも、ランドマーク
として皆が活躍できる場ができると良い。
- ・観光面でも、宿泊施設が充実している箱根と連携し、全国的基盤のあるイベントが
できると思う。
- ・小田原にはキーワードとなるものが少ない。行政も縦割りである。かまぼこ・梅干
し・寄木細工など、キーワードとなるものの多くが経済部にあるが、まだまだ違う
キーワードがあるはず。小田原ブランド研究会のようなものを立ち上げ、キーワ
ードづくりや新たな商品開発に取り組んでみてはどうか。
- ・プロの仕事を邪魔しないような仕組みづくりも必要。それは団体と個の分け方を考
えること。市民文化祭は基本的には団体だが、個を活かしたイベントも必要だと思
う。個としてのプロをどのように活用するかが課題である。

【露木委員】

- ・ものづくりの観点からも、文化はまちづくりに連動するといえる。
- ・寄木細工のアピールにおいても、作品単独ではなかなか見てもらえない。先程話し
た箱根ラリック美術館の企画展には、プロデューサーとして学芸員が関わっている。
ガラス工芸品と寄木細工を並べて飾るだけでは人は来ない。学芸員が2年半かけて
寄木細工の歴史について地道に調査し、ラリックとの関係をストーリーとして組み
立てており、それが人を呼べる魅力となっていた。
- ・物と場所に加え、指揮するプロデューサーや機関が必要。小田原では、物は豊富に
作れるし、場所も新市民ホールや清閑亭があるが、プロデューサーが育っていない。
その仕組みができることで、経済活動も文化も発展し、心の豊かさも生まれてくる
のではないか。

- ・経済面でいえば、職人が育ちにくい環境になっている。興味を持ち、やってみたいという若い人はいるが、受け入れ側に体力がないのが現状。

【桧森委員】

- ・プロの職人や芸術家に対して値切るまちは発展しない。文化都市、創造都市とは、プロに多くのお金を払えるまちである。

【平井委員】

- ・文化の再生・創造は、社会や経済の再生・創造につながる。文化観光は一つの解決策であり、文化活動や経済活動は、地域社会の絆を再生していくツールと考える。
- ・仕組みづくりが重要だと論じている段階はすでに終わり、これからは具体的にこうするべきだと提案していかなくてはならない。
- ・ラリック美術館には学芸員のほかに敏腕営業マンがおり、2人が車の両輪として動いていると聞いている。情報発信して客を連れてくる役割の人も必要。
- ・「まちえんカフェ」で鬼木委員にお話しいただいた際に、「OPEN YOKOHAMA」に感銘を受けた。小さなツアーも網羅的に行い、魅力的な冊子もできている。実際に行ってみたが、このようなソフトの仕掛けは重要だと感じた。
- ・大森委員が駅前及び三の丸地区の整備について提案されていたが、開発により将来に負債を残すのではないかと危惧している。大きなハードに頼らずソフトでカバーしていき、ハードについては既存のものを最大限に活かしていきたい。例えば文化財は、保存するだけでなく社会教育施設としての活用もできる。市はこれまでに様々な政策を進めてきたが、これからは部局の枠を超えて取り組んでいくべき。
- ・岩城委員のおっしゃる原風景は大事。政策的な遺産の掘り起こしも重要である。
- ・桧森委員のお話にあった、女性・若者・外国人をマイノリティとするのは生物学的特徴・地理学的特徴に基づく人間の Kategorisierung であり、社会的には職人・自営業主・農林業従事者がマイノリティ化している。このような方々が脚光を浴びるような位置付けとすることが、他の文化振興ビジョンにはない新しい切り口となるのではないか。
- ・岩城委員から通りに小田原色豊かな名前をつけて彫刻等を配置するという提案があり、それには共感するが、例として挙げられている名前では、どこにでもあるようなものになってしまうと思う。西海子や巡礼といった、長い間引き継がれてきたものを掘り起こして大事にしていきたい。
- ・小田原の祭には40基もの神輿が出る。担ぎ方、木遣唄、装束など小田原独特のものを大事にしていくという視点をビジョンに盛り込みたい。

【石塚委員長】

- ・開発について市の財政状況は不明だが、何らかの手を打つには予算が必要。短期間で集中的に整備するのか中長期的に考えていくのかも、議論になると思う。

【杉崎委員】

- ・小田原の祭や神輿でも、海岸で行われるものと国府津で行われるものとは同一ではない。市内でも地域によって異なるものに配慮しなければならない。

【山口委員】

- ・行政が市民と協働の組織体を作ることができるのだろうか。個人として対応できても団体としては限界があるので、それに対してどういう組織を作っていくかを考えさせていただきたい。
- ・私自身が郷土文化館で実施している事業は文化的なものであるが、一方で観光的要素も持っていると感じている。文化と観光が密着しているものであることは間違いない。
- ・二宮尊徳翁に関しては、行政でも力を入れている。例えば、TRY フォーラムでは芋こじ（集团的な懇談や討論による研鑽）の手法を採用した。
- ・郷土文化館のような歴史的建造物は、活用するだけでなく適切に整備し、長く維持していく必要がある。
- ・資料2（方向性について）に記載された平井委員の意見「文化振興は、狭い意味での文化のためというよりも、地域の様々な側面をより豊かに高め、問題を解決するための有力な手段と位置付けるべき」に賛同。

【間瀬副委員長】

- ・文化事業の実施に当たっては、予算規模の面では現在の経済状況よりも少し上を狙い、その背伸びした部分については知恵で頑張ってもらいたい。
- ・委員の皆さんからのお話を伺って、行政内部に限定することはないが、専門的な組織を作る必要があると思った。プロデューサー、ディレクターといった専門職を置き、市民レベルで行われているものを全体的に連絡調整できる機関があると良い。
- ・文化活動を通じた様々なアクションは、行政からも市民からも各地で起こっているが、相手方となる商店街・個人・行政がそれを受け入れていない。文化は非常に幅広いが、市民が生活の中で必要なものだと認識し、受け入れる土壌を作るところから始めなければならない。
- ・文化は必要という考えを皆が持つために文化振興ビジョンを定め、それを共通の物差しとして行政と市民と一緒に実現させていく。じわじわと効いてくる漢方薬のようなもので、「文化化」によりじっくりと課題を解決し、社会全体で文化振興に取り組んでいけると良い。
- ・行政組織や文化団体間に横串を刺していく必要があり、行政内部も縦割りをなくしていかなければならない。これまでの皆さんの話から、連携がうまく取れていないと感じる。皆が連携して、横に広がっていきけるような組織づくり、仕組みづくりが大事。

【石塚委員長】

- ・議題3の具体的な取り組みについて大いに議論していただいたので、そこから方向性へと絞り込んでいけるのではないかと。
- ・最後に桧森委員からお話しいただいた上で、次回はビジョンのたたき台を見ながら進めていきたいと考えている。

【神馬委員】

- ・ビジョンには長期的な視点が必要。今の人だけの問題ではないので、将来の担い手に対する取組は必ず入れたい。

【平井委員】

- ・国に言われたからやる、ビジョンに書かれているからやるのではなく、意見を出し、コミュニケーションをとっていくことが必要。
- ・文化振興は大事だからやれというのではなく、文化振興は市民のためになるということを示すべき。市民が不安に思っていることに応えるビジョンとしたい。やはり将来への不安、次世代への不安が大きいと思うので、経済・教育・コミュニティは柱となり得る。

【石塚委員長】

- ・平井委員の今の意見が、委員の共通認識ではないかと思う。

【桧森委員】

- ・皆さんの議論を聞き、図にまとめてみた（別紙のとおり）。中心となるのは、小田原という都市ブランドの再構築と考えられる。
- ・芸術文化、景観、生活文化、祭、伝統工芸といった小田原の価値を高める文化資源により、日本中の人に良いイメージを持ってもらうことで、小田原というまち自体が一つのブランドとなる。さらに、小田原の都市ブランドが付加価値を生み出し、住環境、生活の質、観光等へとアウトプットされていくことを目指したい。
- ・プロデューサーには、文化資源を都市ブランドの価値へと変換していくことと、都市ブランドを様々な付加価値として社会に還元していくことの2つの役割がある。

【鬼木委員】

- ・ビジョンの内容は、課題とその解決策に限定しすぎず、目指す姿を共通認識として描くという形にしたほうが良い。
- ・なぜ文化振興のビジョンでなくてはならないのかという点について言及したい。本日の議論では経済に寄った話が多かったが、文化には経済に還元できない価値があるから文化振興ビジョンを策定するのである。
- ・文化には世界を見る目を変えてしまう驚きがある。アート（art）という言葉には技術という意味もあり、文化は生きるための技術であるといえる。文化を通じて、自分とは違う意見の人が世の中にはたくさんおり、考え方も暮らしも異なる人が同

じまちの中に共存しているということを知ることができる。また、少数派に属する人であっても、文化によってその人らしく生きる権利を実現できる。そういったことも、ビジョンの中に盛り込んでいければと思う。

【杉崎委員】

- ・城下町において形成されてきた古くからの技術や建築が消えていくことを恐れている。小田原ならではの技術を守るための方法論があればと思う。

【平井委員】

- ・金沢市には金沢城復元の技術者を養成するためのものづくりの学校があるが、小田原でも似たようなものができるか。小田原では城郭や寺社だけでなく、旅館や邸宅の復元も行いたい。小田原の伝統的な住宅には数奇屋造りという特徴的な様式があるので、これにより金沢と差別化した観光ができるのではないかと。
- ・清閑亭で老朽化した手すりを修復した際には、地元の棟梁に依頼し、南足柄市の道了尊の杉を使用した。具体的な方法についての検討は始まっている。

【杉崎委員】

- ・職人の範囲を広く考えたい。例えば豆腐づくりも技術である。なりわいも文化であるので、幅広い職種を市として取り上げ、技術を伝承させていく取組が必要。

【大森委員】

- ・久野の里山文化も世界に誇れる小田原の文化である。アートやなりわいだけでなく、日々の生活自体が文化という人もいる。文化に対するイメージは一人ひとり違うので、ただ文化というと偏った受け取り方をされる危険がある。文化の定義をうまく伝える方法はないだろうか。

【桧森委員】

- ・第1回会議でも話したとおり、小田原の人達の頭の中にある共通の青写真が文化だと考えれば良いのではないかと。人々が共有しているものが文化だが、芸術文化に関しては、さらに新しいものを付け加えていく必要がある。
- ・第1回会議の傍聴者からのアンケートに、「自分がやりたいことや既存の事業をビジョンに無理やり結びつけるものではない」という桧森委員の考え方や、市民ホールをビジョン策定の出発点とすることは矛盾している」という記載があった。補足として、ここで批判したのは一般的な行政の姿勢。先にビジョンがあって、そこから具体的な取組が出てくるのだという順序を強調したものである。
- ・小田原の都市ブランド、小田原の価値を高めるために必要なものは何かと考えると、やはり文化ホールが挙げられる。市民ホール基本計画策定専門委員会でも話していることだが、ホールは箱ではなく、インスティテュート (institute)、アートセンターであるべき。箱とそこから積極的に働きかけていく活動とをセットにして考えていかなくてはならない。

(4) その他

【平井委員】

- ・次回会議の会場は、清閑亭としてはどうか。活動拠点の一つとして念頭に置いていただきたい施設である。

(委員了承)

(第1回会議についての市議会厚生文教常任委員会への報告及び傍聴の概要、市民ホール基本計画市民検討委員会の開催概要等について杉本文化政策係長より説明)

(第3回会議の日時・場所について確認)

【石塚委員長】

- ・以上をもって第2回会議を終了する。

